

親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響

— 青年期の恋愛関係と友人関係 —

多 川 則 子

1. 問題・目的

ある特定の人との関係が親密になることで、“人との関わり方についての自分なりの考え方”や“対人関係について個人が持っている信念”が影響を受けるということはあるのだろうか。このような対人関係に関する考え方や信念をここでは「対人関係観」と呼ぶことにする。この「対人関係観」は“人と関わる時はこうすべきだ”“このように接するべきだ”“人と関わることは自分にとって～だ”といった内容を指している。具体的には、実際にどういったつきあい方があるのかを研究した、落合・佐藤(1996)、長沼・落合(1998)などが参考になるだろう。しかし、「対人関係観」は特定の人との関係に当てはまるものではなく、対人関係全般に適応されるような関係観であると考えられる。このような「対人関係観」に対して、ある特定の関係の親密化は影響するのだろうか。

では、関係の親密化はどのように捉えればよいのだろうか。ある人とある人との間に人間関係が成立している状態とは、少なくともお互いが相手の存在に気付き、表面的なものにせよ何らかの相互作用が行われている必要があるだろう。そして、この相互作用の程度によって関係の親密化を捉えることができると考えられる。松井(1990)は恋愛における行動について検討し、山中(1994)は友人行動を検討している。これらの研究は、関係で行われる具体的な「行動」を取り上げ、どのような行動がなされるかで、関係の進展度を評定している。

このように関係の親密さはその関係で行われる具体的な「行動」によって捉えることができる。しかし、関係の親密さは行動的側面だけではなく、認知・感情的側面によっても捉えることができる。ここでは、「相手に対する信頼」を取り上げる。なぜなら、「相手に対する信頼」は二人の相互作用の中から生まれ、そして更なる相互作用を促すものと考えられるからである(Rempel, Holmes, & Zanna, 1985)。

一般に親密な対人関係といった場合、親子関係、友人関係、恋愛関係、夫婦関係などが挙げられる。本研究が対象とする青年期の大学生にとって最も重要かつインパクトの強い関係は、主に恋愛関係や友人関係であると考えられるため、これらの関係を取り上げて検討することとする。

2. 研究1

【目的】 青年期を対象に、恋愛・友人関係の親密化が対人関係観に及ぼす影響を、2時点にわたる縦断的な質問紙調査により検討すること。

【方法】 1999年6～7月(時点1)、1999年9～10月(時点2)の2度にわたって質問紙調査を実施した。授業時間に質問紙の入った封筒を2つ(本人用、恋愛相手用)配布した。本人用はその場で回答してもらった。可能な人には恋愛相手に封筒を渡してもらうように依頼し、回収は郵送で行った。時点間の質問紙照合のため、イニシャルと生年月日を記入してもらった。〈対象者〉時点1では276名(男性117名、女性158名、不明1名)で、平均19.3歳、95%が大学生であった。時点2では136名(男性50名、女性84名、不明2名)で、平均19.5歳、96%が大学生であった。時点1と時点2の両方に回答し、現在恋愛関係にあると答えた51名(男性21名、女性30名、平均19.3歳、94%が大学生)が分析の対象となった[なお、尺度の検討をする際には時点1と時点2の回答を合わせた412名分(恋愛に関する尺度には178名分)に対して行った]。〈質問紙〉(1)対人関係観尺度 長沼・落合(1998)などを参考に作成し、予備調査を行った。因子分析の結果3因子を見出し、それを基に本調査の項目を作成した(28項目)。本調査での因子分析でも同様の3因子を見出した。「肯定的な見方」因子11項目($\alpha = .82$)、「防衛的な見方」因子8項目($\alpha = .76$)、「主張性」因子4項目($\alpha = .64$)となった。4件法(そう思わない、少しそう思う、わりとそう思う、非常にそう思う)で尋ねた。(2)恋愛・友人関係を測定する項目 恋愛相手は現在交際中の相手を、友人はもっとも親しい友人を想起して答えてもらった。①恋愛行動・友人行動 恋愛行動は松井(1993)を基に作成し、25項目からなっている($\alpha = .91$)。友人行動は山中(1994)を基に作成し、21項目からなっている($\alpha = .86$)。4件法(まったくしない、少しある、わりとある、とても頻繁にある)で尋ねた。②恋愛信頼・友人信頼 Rempel et al. (1985)のtrust scaleを邦訳し用いた(26項目)。友人信頼は友人関係に不適切だと思われる1項目を除いて作成した(25項目)。4件法(全くそう思わない、少しそう思う、わりとそう思う、非常にそう思う)で尋ねた。恋愛信頼・友人信頼ともに因子分析の結果、一因子が妥当であると判断し、

それぞれ17項目 ($\alpha = .90$), 15項目 ($\alpha = .90$) を採用した。

【結果・考察】 恋愛・友人関係の親密化を示す指標として、各尺度毎に時点2から時点1の得点を引いたものを使用した。それぞれ「恋愛行動の親密化」「恋愛信頼の変化」「友人行動の親密化」「友人信頼の変化」と呼ぶこととする。

恋愛・友人関係の親密化が対人関係観に及ぼす影響を検討するために、対人関係観の3因子それぞれに対して重回帰分析を行った。従属変数はそれぞれ時点2の対人関係観であり、説明変数は時点1の対人関係観(統制変数として含めた)と恋愛・友人関係の親密化を示す4指標の計5指標であった。その結果、「恋愛行動の親密化」は「肯定的な見方」因子と「主張性」因子に対して影響を及ぼし、「友人行動の親密化」は「主張性」因子に対して影響を及ぼすことが明らかとなった。従って、恋愛関係も友人関係も行動面の親密化に伴って、“他者からの評価を気にせず自分の意見は主張すべきと考えるようになる”といえる。さらに恋愛関係の場合は行動面の親密化に伴って、“対人関係を前向きに捉えるようになる”ともいえる。しかし、恋愛・友人関係ともに、信頼の変化は対人関係観に影響を及ぼさず、また「防衛的な見方」因子に対しては何も影響がみられなかった。

3. 研究2

【目的】 研究1で恋愛・友人関係の親密化が対人関係観へ影響することが、部分的ではあるが、確認された。しかし、その影響の具体的なプロセスについては不明である。また、個別に面接することによって対人関係観の変化を過去の経験も含め広く捉えることができるのではないかと考えた。よって、研究2では面接調査を実施した。

【方法】 研究1の調査時に面接調査への協力を依頼した。1999年7月に半構造化面接を実施した。一人あたりの所要時間はおよそ30分~40分であった。〈面接協力者〉恋愛相手がいると答えた大学生41名(男性8名、女性33名、平均19.5歳)であった。〈面接内容〉今回は、対人関係観が変化した経験についての回答に焦点を当てて検討する。教示は次のように行った。「一般に人と付き合う時に、こういうふうに関わるべきだとか、こういうふうに接するべきだとか、そういった人と関わるときの自分なりの考え方、信念、ポリシーのようなものがあるのではないかと思うのですが、それが、変わったという経験はありますか。」経験があると答えた人には、どういう側面が変化したのか、それは何がきっかけであったのかなどについて質問をした。〈結果の整理〉回答を逐語録に起こし、個々のケース毎に変化した内容に関する

回答部分とそのきっかけに関する回答部分を同定していった。

【結果・考察】 今までに対人関係観が変化した経験がないと答えた人は5名(12%)であり、残りの36名(88%)は何らかの対人関係観の変化を報告していた。〈変化した内容〉様々な内容が報告されたが、その中でも比較的多かった内容は「自分の意見を主張すべきと考えるようになった」(6名)であり、これは対人関係観の「主張性」因子に相当するものと考えられる。他にも、「相手の気持ちや意見を尊重すべきと考えるようになった」(5名)、「干渉しすぎるのは良くないと考えるようになった」(3名)という内容が比較的多く報告された。〈変化のきっかけ〉「自分とは異なる考え方や振る舞いをする人と出会い、その人をモデルとして変化していった」という回答が比較的多くみられ(4名)、「身近な人からの指摘を受けて変化した」と、より具体的場面を挙げた報告もみられた(2名)。このモデルとなる人や身近な人とは、親しい友人が多く、一部恋人もみられた。これらは友人や恋人の対人関係観を自分のものとして取り入れた結果の変化だと考えられる。変化のきっかけと変化の内容には特に関連はみられなかった。また、「友人に裏切られて変化した」(2名)と友人関係におけるネガティブな体験も挙げられていた。このような体験は偶然性が高く、しかし一回限りでもかなり強烈なインパクトを持つと考えられる。また、この2名はともに「人を信じすぎるのは良くないと考えるようになった」と答えており、これは対人関係観の「防衛的な見方」因子に相当する内容と考えられる。これらのことから「防衛的な見方」を強固にするような体験は偶然性は高いがインパクトの強い体験ではないかと考えられる。

4. 総合考察

恋愛・友人関係の親密化が対人関係観へ影響するかを検討したところ、行動面での親密化が「主張性」因子に影響を及ぼすことが明らかとなった(恋愛行動の親密化は「肯定的な見方」因子にも影響を及ぼしていた)。面接調査においても「主張性」因子に相当する内容の変化が比較的多く報告されており、青年にとってこの“自分の意見を主張すべき”という対人関係観はかなり重要なものであると考えられる。また、面接調査では、対人関係観への影響のプロセスが示唆された。友人や恋人の対人関係観を自分のものとして取り入れるというプロセスである。しかし、これは様々な回答の一部を取り上げたにすぎないためさらに検討していく必要があるだろう。また、偶然性は高いがインパクトの強い体験の影響も示唆されたため、このような体験をどのように捉えていくかが今後の課題といえるだろう。